

びわ湖大津歴史百科 第4回ワークショップ

「奈良時代の石山寺の造営と保良宮」

講師：小笠原 好彦（滋賀大学名誉教授・東近江市文化財審議会会長など）

内容：講演／見学（古代の石山寺の説明）

日時：2016年11月26日（土） 13:30～16:30

場所：石山寺塔頭 明王院（〒520-0861 大津市石山寺1-1-1）／石山寺境内

【講演概要】

奈良時代後半の天平宝字5年（761）10月、平城宮の改築にともない、淳仁天皇・孝謙上皇は、近江の保良宮・京に遷都した。この保良宮の遷都にともない、瀬田川河畔にあった小寺院の石山寺が天平宝字5年末から6年8月にかけて、大増改築することになった。この大工事は、造東大寺司に造石山寺院所を設けて実施された。その造営は、『正倉院文書』に、開始から終わりまで写経所関連の紙背文書として残っており、その細かな造営過程、構築した建物、造営従事者、経費などをじつに詳細に知ることができる。また、石山寺との関連から、まだ不明な保良宮の所在地もほぼ推測できる。

【講師プロフィール】

小笠原好彦（おがさわら よしひこ）

1941年 青森市生まれ。

1966年3月 東北大学大学院文学研究科修士課程修了。

1966年4月～1979年3月 奈良国立文化財研究所に勤務し、平城京と飛鳥の発掘調査に従事。

1979年4月～2007年3月 滋賀大学助教授・教授

2007年4月～ 滋賀大学名誉教授

学位：博士（文学・東北大学）

■挨拶（大津市浜大津・石山地区文化遺産活用実行委員会副会長、大本山石山寺座主：鷲尾遍隆）

お集まり頂きましてどうもありがとうございます。私も、小笠原先生とはだいぶ昔から、石山貝塚のお話で色々御伺いしておりましたんですけれども、今回はかつての「保良宮」の場所がはっきり判かったということで、非常に楽しみにしております。石山寺にとっても非常に有り難いお話でございます。

孝謙天皇様と弓削道鏡は、非常に仲が宜しくて——一般的には弓削道鏡はあまり良い様には言われていませんけれども、真言密教になる少しまえの「雑密」に長けた方でした。真言密教といいますのは江戸時代ぐらいまで「あれは邪教である」とか色んなことを言われ、「呪詛・呪術を使って何をしているか分からない」というようなことで、当時でも「訳のわからん宗教や」という形で言われていたんですけれど、奈良の都で、非常に冴えた道教もそう言われていてもおかしくないんじゃないかと思えます。また、「保良宮」は「宮」ですよ、宮というのとお寺がどう関係があるのかと言いま

すと、「石山寺は保良宮を守るためのお寺であった」と私は聞いております。これはどのようにして守るのか、と申しますと、奈良時代では写経の力を借りまして宮を守っていくという形をとったみたいです。写経を、何回も何回もお坊さんが頑張って書きまして、その功德によりまして宮を守っていたようです。

今日は、私は非常に喜んでおります。小笠原先生よろしくお願い致します。

■講演（講師：小笠原好彦）

今日の話のだいたい70%は、石山寺に関わることを話したいと思います。奈良時代に、石山寺の大規模な造営がどういう風にして始まったのかということを中心にして。それからもう一つ、その石山寺造営に至った要因は、平城京（平城宮）が近江の保良宮（保良京）に遷ってきたということですが、ただ、この遷都の理由として——『続日本紀』という奈良時代のことを書いた正式な記録には、「平城京の宮殿を改作（改修）するから、しばらく近江の保良宮に淳仁天皇と孝謙上皇が移る」と書かれていますけれども——実際にそういう歴史書に書かれてあるのは表向きの理由であって、「本当の理由は違うんだ」ということを今日はお話することになると思います。

----- 以下、ホワイトボードを使用しながらの講演 -----

石山寺の造営と造東大寺司

石山寺には、『造石山院所労劇帳』といって石山寺の造営に関する非常に丁寧な、造営の始まりから終りまでのきちんとした資料が幸い残っているわけです。その資料を見ますと、石山寺は、天平宝字5年（761）の12月から造営を開始します。ちょうどその年の10月に、平城宮から近江の保良宮・京へ、淳仁天皇と孝謙上皇が移ってこられたからです。そこで、石山寺を造営するということが起こってきたというわけです。

この『造石山院所労劇帳』には「合作殿廿六宇」と書かれています。要するに、「建物を26棟造る」ということです。

その内訳を説明しますと、「檜皮葺殿六宇 並在板敷」とあるのは、これは檜皮葺・板敷きの建物を6棟造るということです。その6棟というのはそれぞれ「仏堂一宇」「経蔵一宇」「僧房四宇」とありまして、「仏堂一宇」は石山寺の本堂——ふつつ奈良時代ですと金堂にあたる建物——です。これに関して「先作長五丈 廣三丈 高一丈一尺」とあるのは、「既に、長さ五丈（約15m）の間口、横幅三丈（約9m）、高さ一丈一尺（約3.3m）の古い金堂が在った」というわけで、これを「今改作長七丈 廣五丈 高一丈四尺 石居」ということは「この度、長さ21m、横幅15m、高さ4.2mに、建物を大きくする（改修する）」「礎石立ちの建物」ということです。「経蔵一宇」これは今回新しく造るもの。「僧房四宇」これはお坊さんたちのアパートにあたるものを4棟造る、ということ。

次の「板葺殿三宇」、ここには「経奉写堂一宇」「法堂一宇」「食堂一宇」とある。「経奉写堂一宇」は、要するに写経する建物を1棟造るということ。これは結構大きい建物で、長さは四丈、広さは一丈五尺で、写経をいたしますから「板敷」であって「堀立柱」であった。それから「法堂一宇」これは講堂のことです。お坊さんたちが古代のお寺の中で色々な経典を研究し、講釈・レクチャーをする、今でいう教室にあたるような建物です。それから「食堂一宇」これは食堂で、お坊さんたちが一堂に会して食事をする建物。

次は「遷竪殿八宇」、これは既に建っている建物を解体して持ってくる、という意味なんですね。あとで説明しますが、これは信樂から藤原豊成の建物とかを解体して持ってきた、そういう建物が8棟あった、ということなんです。その8棟は、「板屋五宇」と「板葺倉三宇」で、後者は板葺きの倉が3棟というわけです。

その次に「作借板屋三宇」と書かれてあるのは、簡単な板屋が3棟ということですよ。

最後「修理板屋六宇」とあるのは、そのころ既に石山寺に在った建物6棟のことです。

まとめますと、そのころ既に在った建物というのは、「本堂1棟」と最後の「修理板屋6棟」、それから他の文献に書かれている「倉1棟」が在ったと考えられています。ちなみに「修理板屋6棟」というのは食堂、厨、湯屋、僧房などを含んだ6棟です。ですから、石山寺は761年までは全体で8棟の建物から成る小規模なお寺だった、ところが保良宮が遷ってくることによって「大増改修」が行われて26棟の大きな建物を造ることになった、ということでもあります。

では、どうして石山寺は8棟から26棟に大増改修が成されたのか。その要因については、やはり「平城京から天皇が移って来られた」こと——特に孝謙天皇は聖武天皇の娘さんだったわけで、非常に仏教に信心深かった——、あるいは「国家的な事業（たとえば仏会など）」を行う重要なお寺が近くに必要になったためだと考えられています。また、もう一つ重要なことは、——石山寺に関する文書によると——遷都後に大規模な「写経事業」をやっているということ。これは平城京の時代にも、東大寺の「造東大寺司」というところで非常に大規模に行われていた事業ですが、東大寺はそのころ大仏殿は出来ていましたが東塔を造営している最中でしたので、この造東大寺司という役所で、一切経などの写経事業をやっていました。天皇の下で、国家的な予算を使った写経事業をやっていたわけです。天皇が保良宮に移ってきたときも「天皇の下で写経事業を続けたい」ということで、その場所として選ばれたのが「石山寺」でありました。そこで、大増改修と併せて「写経所」を造営するということになったようです。それまでは小さなお寺だった石山寺が、保良宮が遷ってきたことを機に、国家的・仏教的な儀式をする必要性が高まった。石山寺を大きくして、そういったことに応え得るようにしようという動きが一つ起こった。それからもう一つ、それまで造東大寺司でやっていた写経事業を、やはり保良宮の近くでもやる必要が出てきた。今日はあまり詳しくは申しませんが、予算的にはですね、「造営に掛かったお金よりも、写経事業に要したお金のほうが、2倍のお金が掛かった」という決算書が出ているんです。建物26棟を建てたお金の倍のお金が写経事業に費やされた、ということですね。

さてそういうことで、石山寺の造営が行われることになったんですけど、その造営を担ったところがこの「造東大寺司」だったんです。このことも是非知っておいて欲しいんですが、平城京の造東大寺司というのは、当時の日本で最も造営技術に優れた集団が居たところでもあります。ちょっと言いにくいんですが、私自信も、1966年に大学院を出まして奈良の国立文化財研究所というところに勤務しました。当時、この奈良国立文化財研究所というところは、奈良時代・飛鳥時代の建物などの発掘調査に関しては、日本で最高の技術を持つ50人の集団でした。以後、各都道府県にも発掘調査に関わる人たちが5人とかあるいは20~30人という形でどんどん増えていったんですけども、1966年頃はまだ各都道府県には1人か2人しかスタッフがおられませんでした。そういう時代に、奈良国立文化財研究所は50人の発掘調査スタッフを全国から寄り集めて、しかも厳しく鍛えていましたので、当時最高の発掘技術を持つ国家直営の研究所だったわけです。そういうことで、私も何度か、福岡県だとか茨城県、或いは愛媛県なんかで色んな調査をやって「たくさん遺構が出てきたけどもなかなか上手く纏まらない」という場合には派遣されて、遺跡をもう少し掘ったり、資料を纏めるということをしました。そういう意味でも、保良宮へ遷都される時、石山寺の造営に平城京で最高の技術をもつ造東大寺司が担当した、ということを知っておいて頂きたいと思います。

この造東大寺司は、実は、石山寺を造営する前の天平宝字3~4年にかけて、平城京で法華寺の金堂を造っていました。これは光明皇后が、新たに阿弥陀浄土院というものを造らせたわけです。当時、無量寿経の信仰が非常に盛んになってそして阿弥陀経が信心されてたわけです。それで「浄土」ということを意識して、法華寺に阿弥陀浄土院という金堂を1年掛けて造ったわけです。これの財政は、光明皇后がお金を集めて、また法華寺の尼さんたちもあちこちから浄財を集めました。ところが、完成を向かえる前、天平宝字4年半ばに光明皇后は亡くなってしまいました。そこで同5

年に、光明皇后の一周忌を阿弥陀浄土院の金堂で行うということがあったようです。で、そのあとですね、都が近江・保良宮に遷ったものですから、石山寺の造営というのは、法華寺金堂を担当した造東大寺司がそのまま国家予算をもって造営することになったんです。奈良時代の761年（天平宝字5）12月に造営が始まり、翌年8月にはもう26棟の建物が完成していました。造東大寺司は12月から8月の間に26棟の建物を全て完成させたということです。

ところが、——さっき鷲尾さんもお話しされたように——この石山寺のお寺が完全に完成するまえの762年5月23日に、淳仁天皇と孝謙上皇が、道鏡のことで仲違いしちゃった、不和になっちゃったんですね。まあ、簡単に申しますと、淳仁天皇が政治を執ったわけですが、孝謙上皇は運悪く、平城京から近江に移った直後に体調を崩すということがあったみたいです。そのときに体調を治してくれたのが、道鏡なんですね。そういうことから孝謙上皇と道鏡がものすごく親しい関係になった。しかも普通の親しさじゃなくて、男女関係としての親しさが入ってきたわけです。そうすると、藤原仲麻呂は孝謙上皇に直接言えませんので、淳仁天皇に「道鏡が夜な夜な孝謙上皇の菩提所に通ってくるのは如何なものでしょう」と言って、やめさせようとしたわけです。淳仁天皇がどう伝えたかは分かりませんが、再三言ったようで、とうとう孝謙上皇がキレちゃったんです。で、ただ怒ったんじゃなく、「私はあなたに天皇の位を渡したんですよ。もう今日からは、天皇の権限は私も取り返します、重要なことは全て私が判断しますからあなたは小さな判断だけやいなさい」という形になって、この5月23日の仲違い・政治問題になったんです。そういうことで、この日に淳仁天皇は平城宮に戻ってですね、宮殿に帰った。そして孝謙上皇のほうも、以前お母さんが使っていた法華寺に戻るようになった。

結末としてはこういう話なんだけれども、そもそも保良宮がどうして造られることになったのかを、これから少しお話しします。ここには歴史的に非常に複雑な、いろんな問題が介在していることをまずは知っておく必要があります。『続日本紀』には、天平宝字3年（759）11月に「保良宮を造らしむ」と書かれています。何故造らせたかということとは、あとで出てきます。で、天平宝字5年（761）の正月になると——それまで「保良京を造る」という話は出てきませんでしたけれども——突然に「保良京に於いて、諸々の司の史生以上の人たちに宅地を班給する」という文言が出てきます。ですから、『続日本紀』は「保良宮を造る」と言いましたが、保良宮だけではなくて保良京も一緒に造っていたということが解ります。そういうわけで761年には「宅地を官人たちに与えるから、それぞれ皆要求せい」ということです。そうすると淳仁天皇と孝謙上皇は、同年10月13日に、「平城京から保良宮に行幸した」と書かれています。保良宮にいつ着いたか、ということは書かれていませんけれども、奈良と石山は40kmほどあります、——行幸ですから一日にどれだけ進んだか分かりませんが——だいたい一日15kmほどは進みますから、3日間くらいで着いたと思います。ですから10月15日にはもう保良宮に着いていたと思います。そして、19日になったら一旦落ち着いたみたいで、「近江の国の按察使・藤原御楯の邸宅に行幸して宴会をやった」とあります。続いて「太師」とありますが、これは藤原仲麻呂のことです。仲麻呂は中国かぶれして「中国の使い方のほうが近代的だ」ということで、太政大臣のことを太師というふうに使っていました。「太師の邸宅に行幸して宴会をやってお酒を呑んだ。それは飲を極めて終わった」と書かれています。19日以降は淳仁天皇も孝謙上皇も落ち着いて、仲麻呂の屋敷で宴会をするような状態になっていたということですね。そして、同年十月の条で、ようやく保良京遷都の理由が出てきます、「奈良の宮（平城宮）を改めて造るために、暫く移りて近江国保良宮に御します」これは、それぞれ新しい天皇が立ったときにも宮の改修はしているんですけども、普通は小規模なものだったのでしょね。ところが、天平宝字2年に淳仁天皇が孝謙上皇から位を譲ってもらった、ということで仲麻呂はこの際に——平城宮は710年に藤原京から遷ったわけです。そうするともう50年も経っていたということもあって——大改修をしようとした。そうすると、天皇が平城宮の御在所に

居るわけには参りませんので、改修の間、近江・保良宮に移ったということがここ（『続日本紀』）では書かれているわけですが。しかしこれは嘘ではないんですけれども、表向きの理由であって、本当の理由というのはまた別にあるんですね。

758年、渤海からの使いが日本に帰ってきます。渤海使は「唐は、755年に安史の乱が起こったので、玄宗皇帝は四川省の成都に難を逃れております」と情報を入れたわけです。当時、日本と新羅の関係は非常に悪かったわけですから——どんな国でも、両側から攻められると国は墮ちるんです。かつて朝鮮半島は百済・高句麗・新羅の三国があった。ところが新羅と唐から攻められた百済は滅亡した——玄宗皇帝が西端・成都まで逃げている唐は、もう新羅を支援できないだろう、ということです。これを干載一隅のチャンスと捉え、渤海が北から、日本が東から攻めて新羅を落としてしまおう、そういう計画を立てたわけです。そのためには、平城京に都を置いていたのでは兵士を送るのにも渤海との連絡を緊密にするにも難しい、ということで琵琶湖のある近江に軍事的な本拠地を移す必要があったんです。これが、保良宮・保良京を造った本当の理由なんです。『続日本紀』には「平城宮の改修を行うために暫く移る」と書かれていましたが、時代の前後の状況を見るとですね、実際にはむしろ新羅を攻めるという目的のために遷都が行われたということなんです。

田上山作所と甲賀山作所

石山寺の造営を、もうちょっと丁寧に見ておきましょう。造東大寺司は、石山寺をどういうふうにして造営したかということなんです。造東大寺司に派遣された人たちは、期間はほぼ1年と見なされていたようです。そうすると、石山寺の建物26棟を建てるためには、膨大な量の建築材・木材を必要とするということです。

造東大寺司は最初、「甲賀山作所」というところにおいて、山に入って、製材あるいは材木の伐採を行ったわけです。これは既に、造東大寺司が甲賀山作所というところを持っていたわけです。以前、「紫香楽宮」を造るときに利用した杣山があったから、ここから造営のための木材を伐ったというわけです。

その内容が『正倉院文書』にも出ておまして、「甲賀山作所で二百五十三物を作った」と書かれています。「工（工人）は二百三十三人関わった」とか、「柱22本作った。それに工人が43人関わった」、あるいは「柱料の桁を6本作るのに、工人が6人関わった」「桁21本作るのに工人が41人関わった」「角木——建物の中の隅のところに使う太い材——を4本作るのに、工人が6人関わった」、それから「架（＝垂木）200本作るのに、工人が137人関わった」などと書かれています。

それから「自木本運道材廿四枚」とあるのは、木を本拠地から運ぶために必要な、道を作る材料24枚ということでしょう、「61人がそれを運んだ」と書かれています。それから「柱19本を運ぶのに57人が関わった」「柱料の桁5本を運ぶのに4人が関わった」と書かれています。ところが、肝心なことは、この甲賀山作所から——最初12月に伐木を始めて1月に出来上がった——材木を運び出そうとしたときの事です。実際「三雲」の津から筏を組んで、石山寺まで運ぶということをやったわけですが、そうすると時間が掛かってしょうがないということが分かったわけです。

そこで、当時の工人の中心メンバーですが——これは皆さん是非覚えておいて下さい——、その中でも一番重要な人物は「安都雄足」という人。この人は『正倉院文書』には一番たくさん出てくる人ですが、ただし『続日本紀』には一度も出てきません。造東大寺司の四等官（＝主典）で、石山寺造営では一番の責任者でした——「別当」と当時言われていました——。その次は、長上——長上工といって造東大寺司の木工の技術屋さんですが——の「船木宿奈万呂」という人がいます。この人は、模範的な造り方なんかを皆に教えた人で、造東大寺司の木工のプロ。その次は、装潢——

これは石山寺でも写経をやっていたので、写経した後にそれを巻物に作っていくんですが——をやっていた「能登忍人」という人。つまり写経をやったときの最終的な仕上に関わった人。そして次は重要な人ですが、領の「上馬甘」。これは本当は「上村主」が姓（かばね）なんですけども、古代の文書でこれが頻繁に出てくるときは省略しているわけです。「馬甘」も、本当は「馬養」なんだけれども略している。それからもう一人、「下（村主）道主」という人。馬甘と道主、この二人が事務官で、いつも文書を書く「案主」という役職。つまり、事務のトップには安都雄足がいて、その下に馬甘と道主がいたということです。で、あとは「玉作子綿」という人、——これはこのあとお話ししますが——「甲賀の山作所では運搬に時間が掛かり過ぎてダメだ」ということで、安都雄足が「田上山作所」を開かせるんですね、田上ですべて木材を伐採（調達）するというふうに大英断をやったわけです。その田上で、木材を切る一番の中心になっていた工人、これが玉作子綿という人です。その次は「三嶋豊羽」、これもやっぱり造東大寺司の木工工人です。それから「品遅（品治）石弓」という人、この人は、石山寺のなかの工事現場の領。それから「秦足人」という人も石山寺内の工事現場の木工です。こういう人たちが、次から次へと建物を建てていった人たちですね。「工廣道」も石山寺の現場で建物を片っ端から組んでいった人。それから、「弓削伯万呂」この人の役割はちょっと違っていて、厨房係りとして工人たちに食事をやった責任者です。それからまた木工の工人として「穂積河内」「丸マ男公」「甲賀深万呂」「縣主石敷」「丈マ真犬」、こういう人たちが石山寺の現場で、田上山作所から運ばれてくる柱・桁・梁・垂木なんかの木材を組んでいったわけですね。木材の最後の仕上げはこの石山寺の工事現場でやったんですが、田上山作所で粗っぽく製材された木材はみんな、山作所から天神川まで運んで、そこで筏を組んで流して、大戸川、瀬田川と流していった。そして石山寺の津で降ろして、境内の工事現場で建物を構築していった、こういう作業工程が執られたわけです。

これまで見てきた工事関係者の名前というのは、天平宝字6年の正月28日に主典の安都雄足が書き上げたものから、1月にはこれくらいのスタッフですが、そのあとにもっともっと沢山の人が関わっていくわけです。そのことは、——あとで皆さんに回覧しますが——実はこの『正倉院文書（書籍版）』に非常に細かくですね、石山寺造営に関わることが丁寧に書かれているんです。「何月何日に田上山からどれだけ木材が運ばれた」あるいは「何人がこれこれの食事をした」とか、そういうことを全部帳簿につけてですね、一切合財みんな丁寧に記録されているんです。また、この文書の一番最後には「それぞれの部門の決算書」がみんな出されているんです。これは凄いもんでして、奈良時代に石山寺の造営に何がどれだけ掛かったのか、全部の決算書が出ている。残念ながらこの決算書、虫食いに遭って数字がすべては読めないんです。ところがこの研究を行った福山敏男さんという人が、これを丁寧に計算をして、虫食いの決算書に全部数字を入れるということをやっているんです。そういうことで、ある意味では石山寺に関しては造営の始めから最後の決算書まで——しかも項目ごとにみんな帳簿があるんです。鉄はどういう形で使ったか、あるいは木材はどういう形で集めてどう使ったか、それから食事のところも食事の帳簿をつけています——こんな凄いことをやって、しかもわずか1年で造営を完成しているんです。

そのような形で工事は進んで、見事にこの石山寺の造営というのは成し遂げられるんですね。先ほども述べましたように、天平宝字5年（761）12月に工事が始まって、翌年8月には26棟すべてが完成したということです。その26棟の内訳にはですね、信楽から解体して持ってきたものもあるんです。ただし、野洲川を流して持ってきているときに、一部分流失したものもあるようです。そういうときは代金を払っていたようです。まあ、解体して持ってきたものというのはそんな重要なものではないんですね、やっぱり新しく造るもののほうが重要視されていましたから。で、わずか1年で26棟もの建物を完成させた、これの妙味は、最初に安都雄足が甲賀山作所から田上山作所への変更を決めたところにある。たとえば石山寺の現場から「これとこれが必要」と連絡に行く場合、甲賀までは1～2日くらいか

かる。ところが田上なら「垂木が急に50本必要だから、朝までに運んでくれ」という場合でも、石山寺～田上間はゆっくりと歩いて2時間かからないですから。

保良宮・京の遷都と藤原仲麻呂

次は、肝心要の「保良宮」の話をしていただきます。先ほども申し上げましたように、『続日本紀』では「淳仁天皇が即位したから、また平城宮が50年も経っているから改作をする。そのために暫く保良宮に移る」というもっともな理由を言っているんです。ところが——是非知っておいて欲しいんですが——、歴史書が理由を言っている場合は大抵は表向きの理由でして、本質・本音は書かないものなんです。歴史書に書いてあるものは裏があるんです、必ず。だから保良宮の場合も、確かに平城宮を改修するんだけど、実は逆であって、新羅征討のために淳仁天皇と孝謙上皇を大津まで動かしたというわけです。そうすると平城宮の内裏は空っぽになりますから、その間に大改修してしまおうということなんです。ところが『続日本紀』に書く場合は、表向きは書いて裏のことは書かない、これは古代人としては優れています。

天平宝字2年(758)12月10日に、渤海使から「玄宗皇帝は四川省の成都に避難している」という報告があった。安祿山の乱(755)から三年送れて、日本は情報を得た。そうすると仲麻呂は、「これは新羅を攻める千載一遇のチャンスだ」と考えるわけです。もしもこれが実現していたら——のちに秀吉が朝鮮半島を攻めましたが、それより数百年前に——仲麻呂が朝鮮半島に攻めて行ったということが起こったかも知れないんです。ところが結果的には道鏡が現れて、そうはならなかったわけです。

そこで天平宝字3年4月28日、新羅の人131人を、武蔵国に強制的に移転させている。古代でもそういうことが起こるわけですね。その次、同年6月18日、大宰府に戦いのための「行軍式」——軍事行動の規定ですね——を作らせる。これは白村江の戦いのときの失敗を鑑みて——白村江のときは日本も百済も行軍式がなくて、「我こそは一！」とやって完敗したわけです——作らせたということです。そしてその次、同年11月16日条に、「保良宮を造営する」という話が出てくるわけです。

天平宝字5年正月9日条には、「美濃と武蔵の少年20人に新羅語を習わせる。新羅を征討するためだ」と『続日本紀』にははっきりと書いているんですよ。これは凄いことです。まあ、日本が勝ったあとに、朝鮮半島での通訳などに彼らが必要だということでしょう。同年正月21日条、「保良京において史生以上に宅地を班給した」。これも何故かという、戦いになったら三月半年では終わらない可能性があります、そのために保良京に数万～10万人の人たちを留めておいて、軍隊がさらに5千とか必要になったら一気に軍を支援・再編成して新羅を落とす、ということです。そういうことの為に、「みんなが平城京に居て、大本営が保良京にあっただけではいざというときに動けない」仲麻呂はそう睨んだんだと思います。同年10月13日、さっきも述べたように、天皇・上皇が保良宮に行幸しました。そして10月28日条には「保良宮への行幸は平城宮の改作のためだ。だから保良宮に移る」と、表向きは逆にして書いてある。11月17日には、藤原朝狩——これは仲麻呂の四男坊です——を東海道節度使に任命します。要するに朝狩がこの戦いの中心であり、大將軍として派遣されたということです。そして、船500艘を作らせておったんですけど、なんとなんと394艘の船が出来上がった、そこで兵士40,700人を動員するということに取り掛かったわけです——白村江のときには3万数千人でした——。もしこのままいっていたら、762～3年頃には新羅は完全に落ちて、唐の玄宗皇帝は八年間長安城に戻れなかったわけです、その間に地図は変わって朝鮮半島は日本・渤海の領土になっていたでしょう。その後どうなったかは分かりませんが、おそらくは、私は最後の決戦をさせていただこうと思います、日本と渤海のど

ちらが勝つか分かりませんが、あの当時、おそらく38度線の線を書いて「仲良くここで分けよう」ということにはなり得ないでしょうから。

まあそういうことで、保良宮が遷ってきて行幸もあったもんですから、そこで仏会なんかをする場合は一つ、平城京の東大寺まではいかないまでもしっかりとしたお寺が必要になった。そしてもう一つは、東大寺で行っていた写経事業を何故奈良で続けますか、「やはり天皇の足下でやりたい」とおそらくは孝謙さんの強い要望があったと思います。で、その当時、造東大寺司には「良弁」が関わっていました。良弁は「それならば」ということで、「石山寺という小さいお寺があるから、あれを大改修すれば適う」と言うわけです。工事が着手された直後も、良弁は現地を訪れまして、淳仁天皇や孝謙上皇が石山寺へ来たときに不快感を覚えないように、細かいことまでみんな指示して帰った、という記録が『正倉院文書』の中に書かれているんです。そういう点では、この背後には良弁もまたいた、ということですね。

天平宝字6年正月28日条には「兵士が用いる胄や上着なんかを大宰府に作らせた」とありますが、同年5月23日には、淳仁天皇と孝謙上皇が——道鏡が現れて——不和になってしまう。そして二人とも平城京へ帰ってしまった。新羅征討を推し進める藤原仲麻呂の計画は、ここで頓挫したわけです。そのあと彼も平城京へ戻ってしまいます。

天平宝字7年には、新羅の使いが「前約に違反する」と通告に来たり、また渤海の使いが来ましたが計画は進められない、「戦う約束はどうなっていますか」と聞かれても返事もできない、という状態でした。

それで天平宝字8年7月になると東海道節度使も廃止してしまったわけです。さらに8月12日、仲麻呂は道鏡を払い退けようとして画策した。その画策の仕方が孝謙さんの怒りを買って、結局、仲麻呂は反乱を起こすことになり、で、仲麻呂は一週間で倒れた。

こういうことがあって、石山寺の造営はすべて完成したわけです。そこから石山寺は見違えるような素晴らしいお寺に変わったわけです。

さて、そういうことで、元々石山寺の造営には保良宮が関係していますから、保良宮はどこに在ったのかということが一番重要な問題になるわけです。細かいことは説明する時間がなくなりましたので、急ぎ足でいきます。保良宮の現在の研究状況で説明しますと、まず瀬田川がありまして、その西側に台地が2つあります、「石山国分台地」とその少し南にもっと大きな台地があります——こちらは住友の活機園があります——。で、現在、石山国分台地にある「晴嵐小学校」の場所が保良宮だというふうに言われています。そしてこの場所からは、平城宮と同じ瓦が出土しています。軒丸瓦が4種類、平瓦が3種類出ていますが、これらはすべて平城宮から持ってきたものです。ですからやはり、この晴嵐小学校の場所に保良宮が在った、ということは間違いないです。ただし、——私は奈良国立文化財研究所で13年間平城京・宮と飛鳥の発掘をやりましたが——重要なことは、「平城宮では天皇の御在所も内裏の正殿も、中心となる建物は一切瓦葺をしていない」ということ。晴嵐小学校からは瓦がたくさん出ますから、ここは御在所の可能性は考えられないのです。したがって、ここは古代の役所である「官衙」——役所の場合はみんな瓦葺していますから——が在ったんだと考えられます。また、ここには沢山の礎石も出ました。礎石を使った建物はあくまでも役所の建物であり、天皇の建物は当時すべて掘っ立て柱でした。つまり、「礎石なし(=掘っ立て柱)」で「瓦葺でない」という条件で、天皇の御在所に適した場所を探してみますと、現在「住友活機園」がある所——真平らな250m×150mの台地がある所——こそ、淳仁天皇と孝謙上皇の宮殿が在った保良宮とみて間違いない。で、今年の5月15日に機会を得て活機園に入ったわけですが、そこからの景色というのは、目の前を瀬田川が流れ、瀬田橋が架かり、少し北には琵琶湖が眺められる、この最も良い場所に淳仁天皇の御在所が在って、それに隣接して孝謙上皇の御在所が在ったと見做されるわけです。今回私はここが保良宮だと言っているわけです。

今まで、古代史の研究者も考古学の研究者も、滋賀県・大津市の文化財の関係者も、誰一人として活機園の中に入ったことがなかった。私有地であって、研究者が一度も入ったことがなかった。みんな探し回るのは、晴嵐小学校の周りばかりだった。で、私が1979年に奈良から滋賀大に移ったとき、浜大津の疏水近くの宿舎に5年間住んでいましたが、石山寺駅からバスに乗ってくるといつもこの住友活機園の建物を見上げて「あそこに保良宮があれば最高」と思っていた。だけど、入る手立てが無かった。そのうちにですね、あそこは重要文化財になったわけですね。そして十年程まえから幸い、公開するようになったわけです。そこで、昨年5月15日に入ったわけですね。皆さんは住友活機園の素晴らしさに感嘆しておったんですが、私は両方です。伊庭貞剛さんが1904年に住友を辞められてから12,000坪の別荘を造った、そして洋館と和館を造った、これは最高の場所を選んだわけです。淳仁天皇の宮殿の上に造ったわけですから。まあそういうことで、ぜひ皆さんも活機園へ見学にいったときには、伊庭貞剛さんの明治の重要文化財の素晴らしさを堪能すると同時に、そこが淳仁天皇の宮殿の在ったところだと併せて意識して頂くと、いいんじゃないかと思います。

最後に、写経のお話をしておきます。当時、石山寺の大きな目的は、天皇が本尊として観音さんを作っておられて、崇拝できるようにしておりました。けれども、むしろ国家的な大事業としての「写経」をどこでやるかということ、その白羽の矢がたてられたのが石山寺であり、この大事業をすることが石山寺の最大の目的だったんです。このあと現地見学に向かいますが、すべては説明できないかも知れませんが、ちょっとだけここで述べさせていただきます。配布した石山寺境内図をご覧ください。瀬田川のほうに東大門があり、門の前には石山の津がありました、いま観光船が着いているところです。田上山作所からたくさんの木材が筏を組んで運ばれて、この津で荷降ろしがされました。で、東大門から境内に入ると真直ぐに道が伸びていますね。こう理解してください、「道の北側（珪灰石の石山の麓）には、石山寺に直接関わる建物をたてて、道の南側には写経に関わる建物を基本的に建てていた」ということです。この会場、明王院なんかも写経所の中心的な場所だったと理解していいわけです。ですから道の南側は、当然、写経生の宿坊、食堂、お風呂など、写経関係の建物がドーンと並んで、北側には本堂などのお寺関係の建物があったわけです。また、奈良時代の文献には、石山寺には塔が出てこないんです。この谷間には、どうも塔を建てても冴えないと思っていたらしく、塔の造営が記録されていないんです。いまでこそ、有名な多宝塔が本堂の上に建っていますが、奈良時代の石山寺はそういう空間だったようです。従って、東大門から石山寺に入って参りますと、右手にはお寺に関わる建物、左手には写経所関係の建物が在った、写経生も20～30人居ましたから彼らの食事・風呂・トイレ・寝るところが在った、そういう理解をして頂くのが当時の状況に一番即していると思われます。

ご清聴、ありがとうございました。

